

音楽科における教科の本質に迫る授業づくり

音楽科 和田 麻友美

1 教科の本質とめざす生徒の姿

グローバル化が進展していくこれからの時代において、生徒はさまざまな文化や習慣、経験から異なる背景をもった他者と協働し、よりよい社会を創り上げていくことが求められている。そして、日々の生活や社会の中には、さまざまな音や音楽、音楽文化があり、人々の生き方に直接的にも間接的にも影響を与えている。音楽という一つの文化を通して、他者の生き方やその背景を知り、自身との違いを認めた上で協働していく態度を身に付けていくことが必要である。また、新型コロナウイルス感染症拡大に伴って新たな生活様式が求められている中、リモート演奏やオンラインコンサート、屋外での演奏など音楽に親しむことができる新たな取組が多くなされた。音楽活動も表現する、創る、企画・運営する、発信するなど幅が広がり、音楽への関わり方やあり方も今までとは大きく変化してきている。

だからこそ生徒には、音楽活動を通して音楽の多様性について理解し、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しみながら、心豊かな社会をつくりあげてほしい。そのために、音楽科の授業を通して、幅広い音楽活動に取り組み、音楽の多様性を理解したり、自分の思いを表現するために創意工夫したり、音楽のよさや美しさを味わって聴いたりしながら、音楽と豊かに関わる資質・能力を育みたい。

そこで、音楽科における教科の本質と教科の本質を踏まえた生徒の姿を以下のように考えている。

【音楽科における教科の本質】

生活や社会の中の音や音楽、音楽文化と豊かに関わるために、音楽に対する感性を豊かにし、音楽に親しんでいく態度を身に付けること

【音楽科における教科の本質を踏まえた生徒の姿】

音楽を形づくっている要素とその働きを視点に音や音楽、音楽文化をとらえ、音楽と自身のイメージや思い、生活や社会などと関連付けて、それらのよさを味わっている。

2 当校の生徒の実態と具体的な手だて

当校の生徒は、音楽科の学習活動に意欲的に取り組む。自分たちの思いを表現するために、どのような歌い方で歌うとよいか、どのような表現の工夫ができるか仲間と協働しながら追求している生徒がいる一方、自分の思いやイメージを音楽と関連付けきれず、心の底から表現することの楽しさを見いだせていない生徒もいる。音楽を自分の感情や経験と結び付けて、より強い思いを表現したり、音楽のよさを見いだしたりすることで音楽活動の楽しさを味わわせたい。

<手だてア>

生活や社会と音楽とのつながりについて考えたり、実感したりすることができる題材構成とする

生活や社会と音楽のつながりを見だし、生徒の目的意識を醸成させるために行う。生徒の中には音楽の授業で行ったことと、生活や社会にある音楽を別のものとしてとらえる生徒が少なくない。そのため、自分の感情や経験を音楽と結び付けて表現を工夫したり、音楽のよさを見いだしたりしきれていない生徒もいる。そこで、より生徒の生活に身近な音楽を用いたり、自身の表現を伝えたいと思う相手を具体的に設定したりすることで、生徒が生活や社会と音楽のつながりを実感し、主体的に音楽活動に取り組もうとしていく。

<手だてイ>

音楽を形づくっている要素とその働きを視点に、仲間と考えを交流したり、検討したりする活動を組織する

音楽に対する見方・考え方の広がりや深まりを促すために行う。生徒は、自身が感じとったことと音楽を形づくっている要素とその働きからとらえたことを関わらせてよりよい表現へ追求を深めたり、音楽のよさを見いだしたりしていく。その際に、他者と考えを交流したり、検討したりすることで、より広く、深く音楽のよさを見いだすことができる。これにより、音楽に対する感性が豊かになっていき、より主体的に追求していくことができる。

【参考文献】

- ・ 富山大学人間発達科学部附属中学校研究紀要 No. 73, 2020 年
- ・ 新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校研究紀要第 48 集, 2003 年